※『土方のマサ』から

しんしんと雪の降る夜だった。

高校三年生のぼくは、ウィスキーを買うために、下宿から自転車で飲み屋街にある酒屋に来ていた。手に入れたトリスをアーミージャケットのポケットに放り込み、雪ですべる帰りの坂道で自転車を押していたときだった。坂の上からトレンチコートを着た大男が降りてきた。斜め上からの街灯に照らされたそのいかつい顔に見覚えがあった。

五か月ほど前のことだった。高校の山岳部の先輩玉田と街を歩いていたときに偶然彼に会い、玉田に紹介されていた。

「マサ。これがいまのH高山岳部部長のWだ」

「あ、どうも。工藤です。マサです」

ぼくよりも四年上の山岳部OBということだが、謙虚な挨拶だった。しかし、真っ赤なTシャツにブルージーンズという、一九六〇年代後半、青森の弘前という地方都市ではめずらしいいでたちだった。胸板の厚い、筋肉だけでできたからだにそれは似合っていた。縄文人の血を濃く受けついだ、彫りの深い荒削りな顔が印象に残った。それ以来だった。

「マサさんでないかい」

「んだよ」

「H高山岳部のWです」

「あ、おぼえてるよ。ヒマだったら、一緒に飲まないか」

「ヒマです」

それから、高校をかろうじて卒業するまでの四か月間、一日もかかさずふたりで飲み歩いた。

ぼくはそのころ故あって北海道の実家を離れ、弘前の高校に越境入学をしていた。親の監視の目がないことをいいことに放埒な下宿生活を送っていたのだ。で、毎晩マサの行きつけの店を何軒か回るのだが、彼が支払っているのを見たことがなかった。すべてツケだった。しかし、あとから聞いたところではすべて踏み倒したとのことである。『アゲイン』という見るからに薄幸そうなママがやっているスナックがあったが、ふたりで毎日のようにツケで飲んでいるうちにつぶれた。我われが、『アゲイン』に再び行くことはなかった。

ぼくは玉田から、マサが遠洋マグロ船帰りだと聞いていた。当時、外国帰りなど周りにいなかった。すごいことだった。ぼくはマサの異国体験を根掘り葉掘り聞いた。マサは南太平洋のサモアやフランスのマルセイユ、アフリカ西海岸カナリア諸島のラスパルマスなどに行ったと言う。そのエキゾチックな地名を聞くだけで、東北の片田舎で暮らす高校生のぼくは頭がくらくらするのだった。

「ラスパルマスで船の同僚が島で買った女の子を本気で好きになったんだ。別れ際に、奴はたまたま手に持っていた歯ブラシでその子の髪の毛をすいてあげたんだと。船に帰ってからも、そいつはいつもその歯ブラシの匂いをかぎながらうっとりしていたな」

そんな話を聞くと、ぼくはその場でイッてしまいそうになった。なにしろ高校三年生なのだ。その頃、異国の女性は映画の007シリーズで見るものすごいグラマーな、とんでもない肉体の、女体そのものだったのだ。外国の港町、石畳の路地、酒場の喧騒と煙草の香り、真っ赤な口紅とハイヒール、屋台の匂い、物乞いの老人、白壁の家々、海岸の市場に並ぶ原色の魚たち。南国の海に沈む真っ赤な夕日とヤシの木。マサから聞く話は、ぼくにとって何もかもが刺激的だった。毎晩毎晩、酒場で聞くマサの話はあまりにも魅力的だった。千夜一夜物語だった。

大学受験のことは頭からきれいに消えていた。船乗りになろうと思った。

それから無為な日々を二年ほど過ごした後、ぼくはマサと一緒に蟹工船に乗った。函館からカムチャツカへ、四か月の航海である。マサは二四歳、ぼくは二〇歳になっていた。一九七〇年の春だった。

『清風丸』というその蟹工船は一万トン。二〇〇人の人間を乗せる母船である。大半は船内で、

獲れた蟹を缶に詰める作業をする。ぼくとマサは脚割り場という、蟹工船でもっとも過酷で花形といわれる甲板の作業場につかされた。

二〇数人の気の荒い人間ばかりの部署である。体力もあるけれど過去もあるという連中の集まりだった。顔やからだに刀傷のある人間が少なからずいた。ぼくらの仕事は川崎船という六人乗りほどのちいさな船が船団を組んで獲ってきた蟹をクレーンで甲板に揚げ、甲羅を外した状態でモッコと呼ばれる網に入れて大釜に放り込み、茹で上げる。それをプラスチックの籠に詰めて船内の工場に送り込むというものだった。

北洋の海は荒れに荒れていた。横殴りの氷雨が容赦なく顔を叩き、ゴム引きのカッパをしみとおったしぶきと潮風は冷酷に体温をうばって、からだをギシギシときしませた。朝の八時から夜の十時まで四か月間、土日も休みなしの航海だった。北緯六〇度。一日の仕事が終わって甲板に清掃のための海水をホースで撒くと、撒いたはなから凍っていく日もあった。

寒さというのは人を不幸な気分にする。鼻水を垂らしながら働いていると、ひとはいやでも自分の境遇を惨めだと思いはじめる。子供の鼻水はかわいいが、おとなの鼻水は情けないのだ。後年、ぼくは南シナ海やカリブ海を航海する船で働くことになったが、蟹工船のような底辺感覚を味わうことはなかった。

しかし、この時点では、ぼくは世の中にこんな凄まじいところがあるのかという驚きをまるで修学旅行生のように楽しんでいるフシもあった。ほとんどの漁船員が、東北の貧農の三男、四男であり、小学校卒か、中学校中退であった。文盲かそれに近い男たちがごろごろしていた。

おなじ脚割り場で働く恒夫さんという小柄で朴訥な四〇歳くらいの人が奥さんに書く手紙をぼくがカタカナで代筆したこともあった。夫婦ともお互いにカタカナしか読めず、書くこともままならないためだった。ぼくとマサは高卒という高学歴を隠さなければならないほどだった。

同僚に、横井というマサと同年輩の男がいた。蟹工船の人間にしてはめずらしく行動が思慮深く、すこし陰のある物静かな男だった。ぼくとマサは彼と出航時からなぜかウマが合い、休憩時間などにときどき会話をかわすようになっていた。

問わず語りに彼の話すところによると、彼はある地方団体とヤクザ組織の利権がらみの話に割り込んで、そのうわまえをすっぽりといただき、その上そのヤクザの組長のアネさんもいただいて逃げたのだそうである。ところがその地方団体の幹部と組長が都合の悪い証拠を完全に隠滅した上で彼を詐欺罪で警察に訴え、指名手配となった。日本全国を逃げ回って山陰のひなびた温泉町で逮捕されたとき、所持金はわずか二〇〇〇円だったそうである。その後、仙台刑務所で二年

ほど服役し、最近出所したばかりだという。父親がこの船と同じ船会社の捕鯨船の船長をしており、息子の自分を更正させるために日本でもっとも過酷な労働で知られる蟹工船の、それもいちばん仕事のキツイ脚割り場に送りこんだのだという。

「しかし、刑務所ほどひどいところはないな。人間としての尊厳をすべて奪った上で、ゆっくりと時間をかけてその人間の中心部分から腐らせていくんだ。前科何犯とかいって、何度もああいうところに入る人間はバカだな」

彼は知性もあり、ナイーブだっただけに刑務所暮らしが格別つらかったのだと思う。そして、出航後一か月ほどたった頃だった。彼の両手の指はあまりの重労働と寒さのために二倍に腫れ上がってしまい、船医に注射を打ってもらいながら仕事につくほどになった。デッキの手すりにもたれかかりながら、彼は言った。

「刑務所の方がヨカッタな」

しかし、厳しいのは労働よりもむしろ人間関係だった。

荒くれ男たちの価値基準はただただ腕力と胆力だった。そして、大声での野卑な会話と無意識過剰な粗野なふるまい。ぼくとマサの船室は船底にある十畳ほどの空間だった。そこの蚕棚

ベッドに一二人のイカレタ男たちが起居を共にしていた。仕事を終えた後の酒は主に焼酎。味わうという飲み方とは無縁であり、ただただしとどに酔うための酒だった。ちいさな喧嘩は日常茶飯事だった。

マサはそういうことが苦手だった。ゴリラのような体躯に少年のような繊細な神経を持ち合わせていた。日を重ねるごとに、マサは憂鬱になっていった。船を下りたいと言うことが多くなった。最初の一か月で二〇〇人のうちの十数人が脱落し、本土と往復する仲積み船で日本に帰って行った。そして、補給の人員が、新たに送りこまれてきた。

ぼくにとっては本格的についた初めての仕事であり、ここで敗北したら何をやってもつづかないなと考えていたので、船を下りる気はなかった。何がなんでも、最後までやろうと思っていた。むしろイカレタ男たちを見ながら、あたかも黒澤明の映画『どん底』を観客として楽しんでいるようなところがあった。そして何よりも、カムチャツカという当時の日本人が行くことのできないところに、船乗りとしているということがエキサイティングだった。

ぼくとマサの職場、脚割り場は船の前甲板にあった。そこには四メートル四方ほどの休憩小屋があった。ある日の休み時間、交代で十人ずつほどがダルマストーブを囲んで一服しているとき

だった。タケシという若い男が、たまたまその小屋に迷い込んでいたカナリアほどの大きさの黄緑色をした渡り鳥を捕まえてクビをひねったかとおもうと、ストーブの口をあけて放り込んだ。ツンと毛の焼ける匂いがした。

「何をするんだっ」

とぼくは言った。タケシは低い鼻の両脇をふくらませて、ぼくを睨んだ。小屋全体に気まずい空気が流れた。イノシシのようなタケシのからだが、荒い息を吐きながらさらに膨らんだ。細い目が血走っていた。それから一時間後、マサが船倉のトイレに行ったと同時にタケシがぼくに襲いかかってきた。しかし、惜しいことにタケシは逆上し過ぎていた。上半身にちからの入りすぎた大振りのフックはことごとくぼくの鼻先で空を切った。ぼくは彼のボディに深く一発入れてからうしろに回り、はがい絞めにした。そのままデッキの手すりまで運び、眼下にうねる暗緑色の海を見せて、

「落とすぞ」

と言った。

するとそれまで、からだのちいさなぼくがやられるのを期待してニヤニヤ見ていた連中がどっと止めに入った。北洋の海に落ちたら四、五分で凍え死ぬのは皆知っている。

※つづきは本編でお読みください。